跡見学園女子大学文学部紀要　第四十七号　（二〇一二年三月十五日）

オリエントの事実認識から紡ぎ出される実体性の内部プロセス

――ヘーゲルのオリエント論がもつ特質の資料源泉からみた全体像――

Der innere Prozeß der Substantialität auf Grund der sachlichen Erkenntnisse vom Orient – der Totaleindruck der Bestimmungen in Hegelscher Orient-Lehre nach ihrer Quellenforschung

神山伸弘
KAMIYAMA Nobuhiro

要　旨

ヘーゲルは、一八二二・二三年の「世界史哲学」講義において、その「世界史の歩み」の半分を「オリエント世界」に費やして、オリエントへの強い関心を示している。他方、ヘーゲルの「歴史哲学」のオリエント認識に対して和辻哲郎をはじめとする本邦の哲学者の評価は、まったく低いものである。こうしたなかで「世界史哲学」講義のオリエント論に取り組むには、オリエントに関するヘーゲルの事実認識を検討する必要がある。ヘーゲルは、世界史にオリエントを明確に位置づける画期的な議論を展開したが、そのさい、オリエントの古代の自然性を事実に即して探求する姿勢があり、最先端のオリエント研究の成果を踏まえていた。また、ヘーゲルのオリエント認識は、当時のヨーロッパにおけるオリエンタリズムに対して、オリエントの実体性のなかに主観性の発生のプロセスを見ようとする独自の姿勢でもあったのである。

一．はじめに

周知のように、ヘーゲルは、ベルリン大学において一八二一・二三年冬学期以来隔年で五回、「世界史の哲学」の講義を行っている。この講義の集積版は、「歴史哲学講義」の名でガンスが最初に手掛け（一八三七年）、それをヘーゲルの息子カール・ヘーゲルが改定し（一八四〇年）、後者がのちにグロックナー版全集に収められた（一九二七年）。本邦では、一般に、これがヘーゲルの『歴史哲学』として知られている。[1] その後、ラッソンが、これらに依拠しながらもヘーゲル自身の手稿と講義ノートをあらためて参照して、「世界史哲学講義」として新たなテキスト（ラッソン版）を編纂している（一九三〇年）。

年度の異なるテキストを集積する方法は、ヘーゲルにおける哲学的な認識の発展の歴史を消し去ることから、専門的には近年において採用されなくなっている。こうした反省のなかで、一八二二・二三年の講義のみを複数の講義ノートから集積したテキストがイルティングの主導によって編纂された（一九九六年）。このテキストは、やはり集積という手法にまつわる難点を含みながらも、[2] ヘーゲルの「世界史哲学講義」の出発点を明らかにするものとして意義あるものである。[3]

このテキストを概観すると、ヘーゲルは、「世界史の歩み」という具体的な世界に関する叙述全体のうちほぼ前半すべてを「オリエント世界」に費やしているのがわかる。この事実は、自由の意識がより展開されたギリシア以降の世界よりも、むしろ自由の意識が実体に埋没していると

される「オリエント世界」に対して、当時のヘーゲルが強い関心を抱いていたことをはっきりと示している。

ところが、ヘーゲルの「歴史哲学」におけるオリエント認識に対して本邦の哲学者が下す評価は、まったくもって低いといって間違いないだろう。たとえば和辻などは、「ヘーゲルのごとく欧州人を「選民」とする世界史を是認することができない」（『風土』二七八）[4] としているし、今日の研究者でも、これがヨーロッパの歴史の準備段階でしかないことに不満が述べられたりしている。[5] ヘーゲル哲学の主たる関心を「歴史」とみる説明は多くなされるが、その端緒であるオリエント論になると、あたかも、頬かむりするか触らぬ神に祟りなしとするか、いずれにせよ論じないほうがいいと決め込んでいるようである。このことは、ヘーゲルとオリエント（中国、インド、ペルシア、エジプト）との関係に真正面から取り組む論文が本邦で極端に少ないことに如実に現れている。

こうしたなかで、ヘーゲルの「世界史哲学講義」で展開されたオリエント論に真正面から取り組もうとするなら、オリエントについてのヘーゲルの事実認識がどこからくるのか、という資料源泉を尋ね、さらに、これについての取り扱い方を、ヘーゲル研究者のみならず、オリエント分野に関する専門的研究者によって検証していく必要があるであろう。[6]

二．オリエントの本家意識からする反発

ところで、ヘーゲルがオリエント「古代」に対して下した古典ギリシ

ア以前の段階という評価は、西洋近代に追従して肩を並べたつもりの「現代」オリエントにいる我々にとって容認しがたいものなのだと思われる。和辻は言う。「欧州人以外の諸国民を奴隷視するのはすべての人の自由の実現ではない」（同前）。このことは、ヘーゲルがオリエントを実体性の立場（実体についての知を欠如させて、自由な人格的個体性を認めない立場）[7]としたことへの反発である。

このようにオリエントを実体性の立場だとすることは、「一八一七・一八年自然法と国家学講義」で基本的に確立をみたヘーゲルの歴史構成の概念図式（「自由の意識の発展」）に規定されている、と考えることができるが、[8]これが単純な図式主義なのか、といえば、そのような断定は容易なことではない。というのも、ギリシア以下のヨーロッパの歴史を「自由の意識の発展」として描き出すとき、オリエントをその間に挿入することは、[9]その近代化が西洋化であったという厳粛な事実に照らせば、本質的に困難を極めるからである。

このさい、聖書主義的な歴史観にしたがってオリエントを除外して世界史を構成する道もありえたかもしれないが、[10]ヘーゲルは、オリエントも含めた歴史をトータルに説明するという、おそらく当時の歴史叙述としては画期的な選択をしたともいえる。ただし、オリエントをヨーロッパの歴史に挿入しないからには、自由が不在の自然的な世界としてギリシア以前の古代にそれを位置づける、という選択にならざるをえなかった。このような自然性を先行させる歴史観は、ストゥールの議論（『自然国家の没落について』ベルリン、一八一二年）の影響下のものである。[11]そして、ここから同時に、ヘーゲルには、オリエントの古代の自然性を事実に即して探求するという課題が課されることになる。

もっとも、こうなってくると、実体性の立場がオリエント自身の鏡映であるかどうかといった評価以前に、ヘーゲルのオリエント認識には事実の点で欠陥がある、と指摘して、それに致命傷を負わせる道も拓けてくるかもしれない。ヘーゲルは、根も葉もない嘘っぱちの議論をしているというわけである。和辻は言う。「特に東洋のことに関して彼の時代の欧州人ははなはだしく無知であった。それは何よりもよく彼自身のシナやインドに関する記述を見ればわかる」（同前）。要するに、シナやインドの理解については、我々の方が上手を行く本家であって、物を知らぬ西洋人がなにを言うか、ということになるのではないか。[12]

三．近代オリエンタリズム

しかしながら、ヘーゲルが「世界史の哲学」を講義した当時のヨーロッパは、サイードの言う「近代オリエンタリズム」が隆盛した時期にあたり、「ウイリアム・ジョーンズ、アンクティル＝デュペロン以後、ことにナポレオンのエジプト遠征以後になると、ヨーロッパははるかに科学的にオリエントを認識するに至」ったとされている。[13]ウィリアム・ジョーンズは、一七八四年にアジア協会（Asiatic Society）を設立し、一七八八年以来『アジア研究（Asiatic Researches）』[14]を刊行して、アジア研究の成果を巷間に広めた。アンクティル＝デュペロンは、『ゼンド＝アヴェ

スタ』のフランス語訳を一七七一年に、[15]『ウプネカット』のラテン語訳を一七九四年に公刊する。[16]ヘーゲルは、一八二二・二三年の「世界史哲学講義」において、ジョーンズにも『アジア研究』にも、またデュペロンにも『アヴェスタ』にも言及しており、当時の最先端のアジア研究に依拠しながらオリエントの世界像を結んだことが確実である。

しかも、ヘーゲルを取り巻くドイツの哲学的な環境としても、オリエントを研究し、ここから新しいものを摂取しようとする流れが形成されつつあった。[17]

古くは、ライプニッツが中国の『易経』に関心を示して二進法算術を展開したり、朱子学に触れて中国哲学に関する論評を行ったりしている。[18]また、ヴォルフは、『中国の実践哲学に関する講話』のなかで孔子の道徳論を紹介している。[19]こうした哲学的な系譜は、中国思想を積極的に評価するもので、そこで説かれる理性や自然を重視する発想は、啓蒙思想[20]の展開を大いに鼓吹した。

F・シュレーゲルは、一八〇八年に『インド人の言語と叡智について』[21]を公刊して、その言語のあり方のみならず輪廻思想や二元論、汎神論について概説し、インドにポエジーの根源があるとし、また実際に『ラーマーヤナ』や『マヌ法典』、『バガヴァッド・ギーター』、『シャクンタラー』を紹介して、ロマン主義とインドとを結合しようと試みている。

ゲーテは、ペルシア中世の詩人ハーフィズ[22]への傾倒から、一八一九年に『西東詩集 (West-östlicher Divan)』を著し、東方への憧憬を表明している。ゲーテは、旧約聖書からオリエントの世界を想定していた。なお、ゲーテは、東方でもインドに対しては冷淡であったと言われている。[23]

ヘーゲルの友人クロイツァーは、エジプトの宗教に関して研究し、オシリスとイシスや、エジプトの神々とギリシアの神々との関係などの新たな知見を『シンボルと神話』（一八一九年第二版）[24]で展開していた。この第二版では、インドに対する言及も新たに付け加えられている。

このように、ヘーゲルがオリエント論を学問的に展開しようとすれば、ヨーロッパで進展していたオリエントに関する新たな情報や議論を無視するわけにはいかず、これらに応接してみずからの見解を提示する必要に迫られていたのである。そして、この痕跡は、明らかに一八二二・二三年の「世界史哲学講義」に残されている。

四．まとめにかえて

もっとも、それでも当時の情報や議論には限界がある以上（これはいつでもそうだろうが）、「ヘーゲルの世界史が内容的に言ってもはや用うべからざるものであることは何人も異論のないところであろう」（和辻、同前）と言って溜飲を下げるべきか。だが、ヘーゲルは、極力事実を踏まえながら、オリエントの実体性のなかに主観性なり人格性なりの発生のプロセスを見出そうとしている。[25]東洋と西洋の思想的対話をしていこうと思うなら、このプロセスそのものへの注目があってよいはずであり、「現代」オリエントにいる我々の思想的なエレメントは、それとの切り結びのなかでより明確なものになるのだと思われる。

（この論考は、日本ヘーゲル学会第十三回研究大会（二〇一一年六月十九日、お茶の水女子大学）で行われたシンポジウム「一八二二・二三年の「世界史哲学講義」におけるオリエント論の研究――資料源泉との連関から見たヘーゲル・オリエント論の特質の解明――」において同名の報告をしたさいの配布資料に字句修正を施したものである。）

テキスト

一八一七・一八年自然法と国家学講義　Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 1, Vorlesungen über Naturrecht und Staatswissenschaft, Heidelberg, 1817/18, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1983. G・W・F・ヘーゲル『自然法と国家学講義：ハイデルベルク大学一八一七・一八年』、高柳良治監訳、法政大学出版局、二〇〇七年。

法の哲学要綱　Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 7, Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse [1820], Mit Hegels eigenhändigen Notizen und den mündlichen Zusätzen, Theorie Werkausgabe, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970.

歴史哲学講義：ガンス版　*Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, hrsg. v. D. Eduard Gans (Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Werke, Vollständige Ausgabe durch einen Verein von Freunden des Verewigten: D. Ph. Marheineke, D. J. Schulze, D. Ed. Gans, D. Lp. v. Henning, D. H. Hotho, D. K. Michelet, D. F. Förster, Bd. 9), Verlag von Duncker und Humblot, Berlin 1837.

歴史哲学講義：カール・ヘーゲル版　*Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, hrsg. v. Dr. Eduard Gans, Zweite Auflage besorgt von Dr. Karl Hegel, Verlag von Duncker und Humblot, Berlin 1840.

歴史哲学講義：グロックナー版　G. W. F. Hegel, *Sämtliche Werke*, Jubiläumsausgabe auf Grund des von L. Boumann [et al.] besorgten Originaldruckes im Faksimileverfahren, neu hrsg. von Hermann Glockner, Bd. 11, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Frommann-Holzboog, Stuttgart 1927. ヘーゲル『歴史哲学』上・下、武市健人改訳、岩波書店、一九五四年。

歴史哲学講義：ズーアカンプ社版　G. W. F. Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Bd. 12, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Theorie Werkausgabe, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970.

世界史哲学講義：ラッソン版　Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*, vollständig neue Ausgabe von Georg Lasson, Philosophische Bibliothek, 4 Bde., Felix Meiner Verlag, Hamburg 1. Bd., ^{3}1930; 2. Bd. – 4. Bd., ^{2}1923 (Unveränderter Abdruck 1944).

一八二二・二三年世界史哲学講義：イルティング版　Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 12, Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Berlin 1822/1823, Nachschriften von Karl Gustav Julius von Griesheim, Heinrich Gustav Hotho und Friedrich Carl Hermann Victor von Kehler, hrsg. v. Karl Heinz Ilting, Karl Bremer und Hoo Nam Seelmann, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1996.

註

（1）ズーアカンプ社版は、グロックナー版に基づく。本邦では、グロックナー版に依拠した翻訳が武市健人（鈴木権三郎訳の改訳、岩波全集および岩波文庫）や

長谷川宏（岩波文庫）によって行われている。

その後、ラッソンが、カール・ヘーゲル版に依拠しながらもヘーゲル自身の手稿と講義ノートをあらためて参照して、「世界史哲学講義」として新たなテキスト（ラッソン版）を編纂している（一九三〇年）。本邦では、その緒論が河野正道によって訳されている。ヘーゲル『歴史哲学緒論』、河野正通訳、白揚社、一九三八年。

（2）イルティング版は、ホトー、グリースハイム、ケーラーの三つのノートを集積することにより、テキストを相当に膨らませている。「編纂者の評価によると、ホトーのノートは、その筆記状態からみて講義時間中に記された「口述筆記(Mitschrift)」とみられ、「哲学的な思考の歩みを再現する点でグリースハイムのノートよりも正確で包括的」であるとされるのに対し、グリースハイムのノートは、ヘーゲルの講義の「清書稿(Ausarbeitung)」とみられ、「哲学的に理解の難しい文言のところでヘーゲルが仕上げた含蓄のある表現を適切に再現していない」とされる（Ilting, 526）。イルティング版は、主要にはこの二つを合体したものとなっており、先の対比では、グリースハイム・ノートをそのまま採用している部分も相当見られ、またそれ以外のところにも重複してグリースハイム・ノートと基本的に同趣旨の表現が散見される。ホトー・ノートの記述を斥けてグリースハイム・ノートの記述を選択した部分もあろうが、双方の記述をともに採用したということも考えられる。イルティング版を見てそこにある類似の表現のなかにヘーゲルの思考の段階的な深まりなり広がりなりがあると考えると、足をすくわれかねない。たんに、並べられたテキストの違いにすぎない、ということがありうるからである。」神山伸弘「ヘーゲルによる〈インドの天文学〉理解――『歴史哲学』、一八二二・二三年「世界史の哲学」講義、グリースハイム・ノートの差異――」、『跡見学園女子大学文学部紀要』（跡見学園女子大学）第四五号、二〇一〇年、一一～四二頁（引用は二六頁以下）。

（3）本邦における本書の研究については、次がある。山﨑純「〈歴史の始まり〉としての近代――「世界史の哲学」講義にみられる近代認識の発展」、加藤尚武編『ヘーゲル哲学への新視角』、創文社、一九九九年、二〇五～二二八頁。権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』、岩波書店、二〇一〇年。

（4）和辻哲郎『風土――人間学的考察――』、岩波文庫、一九七九年（原著一九二八年）。このうち、第五章「風土学の歴史的考察」でヘーゲルへの言及がある。以下、本文に本書の頁数を掲げる。『和辻哲郎全集』第八巻、岩波書店、一九六二年、一～二五六頁参照。なお、ヘーゲルが地理的規定を重視している点への和辻の肯定的評価については、本論では問題としない。

（5）高田純「歴史の構造」、加藤尚武編『ヘーゲル読本』、法政大学出版局、一九八七年、三〇九頁参照。

（6）この論考を口頭発表したシンポジウムは、このような問題意識で取り組まれた科学研究費補助金による研究（研究課題「ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性」課題番号二一三二〇〇〇八）の成果の一部である。この研究では、中国分野で橋本敬司（広島大学）、インド分野で久間泰賢（三重大学）、ペルシア分野で東長靖（京都大学）、エジプト分野で栗原裕次（東京学芸大学）が資料の吟味を行っている。また、ヘーゲルの議論の位置づけについて、板橋勇仁（立正大学）、田中智彦（東京医科歯科大学）が検討している。

（7）『法の哲学要綱』によると、オリエントの国では、「実体的精神」に「個体的人格性が埋没して無権利である」(§353, 355)。「実体的精神を知る(Wissen)」段階は、ギリシア的な国の段階であり(§353)、この反射から、オリエントではこの「知」が欠如することになる。なお、私見では、ヘーゲルのオリエント観を斥けることができるとするなら、これを逆転させて、「実体を知り、人格的個体性を認める」という立場がこのオリエントにおいて成り立っていると主張する方向がひとつの筋書きになるだろう。

（8）「オリエント的な国は、実体的な世界観であり、端緒においては家父長的な自

然的全体である。そこでは、個人は、息子としてあるから〈人格そのもの〉でなく、支配者に対して権利や所有を自分だけで独立して持つことが［ない］。」（§166, 邦訳二八〇頁）。

（9）ベックの書は、その第一巻で、古代世界について天地創造から始め、旧約聖書の進行に準ずるかたちで文献実証をしようとしている。Vgl. Christian Daniel Beck, *Anleitung zur genauern Kenntniß der allgemeinen Welt- und Völker-Geschichte vorzüglich für Studirende*, Ester Theil, Einleitung, Urgeschichte, Alte Völkergeschichte bis zu Regierung Alexanders des Maced, Leipzig 1813 (Google). なお、この第一巻は、先に出版した次の書の第一巻中第三期までの詳論と思われる。Vgl. Christian Daniel Beck, *Anleitung zur Kenntniß der allgemeinen Welt- und Völker-Geschichte für Studirende*, Ester Theil, Bis auf die Macedonische Monarchie, Leipzig 1787 (Google); Zweyter Theil, Bis auf die Theilung der Carolingischen Monarchie, Leipzig 1788 (Google); Dritter Theil, Bis auf das große Reich der Mongolen, Leipzig 1802 (Google); Vierter Theil, Bis auf die Entdeckung von Amerika, Leipzig 1807(Google). なお、このうち第四巻では、冒頭モンゴル（元）について触れ、さらに十三世紀から十六世紀までのインドの歴史について触れている。

（10）たとえば、ボッシュエの『世界史論』は、アダムからシャルルマーニュまでの歴史を描く第一部、天地創造から始まる宗教の歴史を描く第二部、スキチア、エチオピア、エジプト、アッシリア、メディア、ペルシア、ギリシア、ローマの国々を描く第三部からなる。Cf. Jacques Bénigne Bossuet, *Discours sur l'Histoir universelle, a Monseigneur le Dauphin, pour expliquer la suite de la Religion & les changemens des Empires, Premiere Partie, Depuis le commencement du Monde jusqu'à l'Empire de Charlemagne*, Paris 1681 (Google).

（11）「国家形成におけるまだ実体的で自然的な精神性という契機は、形式としてはどんな国家の歴史においても絶対的出発点をなすものであって、ベルリン一八一二年刊の『自然国家の没落について』〔ストゥール博士著〕という著書では、この契機が特殊な諸国家に即して、歴史的に、かつ同時に深いセンスと博識をもって、強調され証明されており、これによって国家体制の歴史と歴史一般との理性的考察に道が拓かれたのである。」（『法の哲学』§355Anm.）Vgl. Feodor Eggo, *Der Untergang der Naturstaaten, dargestellt in Briefen über Niebuhr's Römische Geschichte*, Berlin 1812 (Google). Feodor Eggo は Peter Feddersen Stuhr に同じ。ストゥールは、一八二一年から一八二六年までベルリン大学で歴史学の員外教授であった。本書の第一章で、自然国家としてインドについて議論している。

（12）もっとも、そうだとすれば、「自由の意識の発展」図式に呼応して、またこれを打破するためにも、和辻は、「世界史は風土的に異なる諸国民にそれぞれその場所を与え得なくてはならない。」（『風土』二七八）と言って済ませるのではなく、シナやインドのなかに自由の要素を指摘する必要があったであろう。この点こそは、おそらく今日においてもなお深刻な問題なのであり、本邦においてもそれを証す必要がある。

（13）エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』上、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九九三年、六〇頁。Edward W. Said, *Orientalism*, Vintage Books, New York 1979, p. 22.

（14）*Asiatic Researches*, Comprising History and Antiquities, the Arts, Sciences, and Literature of Asia, 24 vols., [reprint] Cosmo Publications, New Delhi 1979–1980 ([1]1788–1835).

（15）*Zend-Avesta, Ouvrage de Zoroastre*, Contenant les Idées Théologiques, Physiques & Morales de ce Législateur, les Cérémonies du Culte Religieux qu'il a établi, & plusieurs traits importans relatifs à l'ancienne Histoire des Perses: Traduit en François sur l'Original Zend, avec des Remarques; & accompagné de plusieurs Traités propres à éclaircir les Matieres qui en sont l'objet, Par M.

Anquetil Du Perron, 2 T., Paris 1771 [reprint: Elibron Classics, 2005].

(16) これは、ショーペンハウアーが感動したことで有名。前田耕作『宗祖ゾロアスター』、ちくま学芸文庫、二〇〇三年、一〇四頁参照。『ウプネカット』については、目下参照しえているものは、*Das Oupnek'hat, Die aus den Veden Zusammengefaßte Lehre von dem Brahm,* Aus der Sanskrit=persischen Uebersetzung des Fürsten Mohammed Daraschekoh in das Lateinische von Anquetil Duperron, in das Deutsche übertragen von Franz Mischel, Dresden, 1882. 本邦翻訳としては、「ウプネカット奥義」福島直四郎訳、『ウパニシャット全書』七、世界文庫刊行会、大正一二年、三四三～四〇八頁。これは、十編の翻訳を収める。

(17) このことは、ヘーゲルがこうした事情を委細漏らさず「世界史哲学講義」に反映させている、という趣旨ではない。

(18) ライプニッツ「最新中国情報」（一六九九年）、山下正男訳、『ライプニッツ著作集』十、一九九一年、九一～一一〇頁。同「0と1の数字だけを使用する二進法算術の解説、ならびにこの算術の効用と中国古代から伝わる伏羲の図の解読に対するこの算術の貢献について」（一七〇三年）、山下正男訳、前掲書、九～一四頁。同「中国自然神学論――中国哲学についてド・レモン氏に宛てた書簡」（一七一六年）、山下正男訳、前掲書、十五～九〇頁。なお、ヘーゲルの「世界史哲学講義」においては、これらについての言及はない。ヘーゲルがこうしたことに冷淡であることについては、別途議論の必要がある。

(19) Christian Wolff, *Rede über die praktische Philosophie der Chinesen,* [1726] (Philosophische Bibliothek Bd. 369), Felix Meiner Verlag, Hamburg 1985. なお、ヘーゲルの「世界史哲学講義」においては、これについての言及がない。

(20) ヘーゲルが啓蒙思想についてアンビバレントである点については留意を要する。ヘーゲルは、中国情報がカトリックからもたらされている点について、留保をしている可能性がある。なお、ヨーロッパの近代啓蒙思想に対して宋明理学が深くかかわっていることの詳細な解明については、井川義次『宋学の西遷――近代啓蒙への道――』人文書院、二〇〇九年参照。

(21) Friedrich Schlegel, *Ueber die Sprache und Weisheit der Indier,* Ein Beitrag zur Begründung der Alterthumskunde, Nebst metrischen Uebersetzungen indischer Gedichte, Heidelberg 1808.

(22) 一八一四年六月七日の日記に、ハンマー＝ブルクシュタルによるハーフィズの詩集に言及する。生野幸吉「解説　西東詩集」、『ゲーテ全集』第二巻、潮出版社、二〇〇三年、五〇四頁参照。ハーフィズ『ハーフィズ詩集』東洋文庫二九九、黒柳恒男訳、平凡社、一九七六年、参照。

(23) 薗田香勲『ドイツ文学における東方憧憬』、創文社、一九七五年、十二頁以下参照。

(24) Friedrich Creuzer, *Symbolik und Mythologie der alten Völker, besonders der Griechen,* Leipzig/Darmstadt ^{1}1810, ^{2}1819.

(25) このことが、中国・インド・ペルシア・エジプトの各領域で詳細に解明すべき課題となる。ただ、そのさい、実体の成立そのものがヘーゲルにとって意味のあることとみるか否か、ということがある。おそらく、それは、意味があるのであろう。